北翔大学教育文化学部研究紀要第６号　　令和３年１月
Bulletin of Hokusho University　　2021 January
School of education and culture department No.6

運動遊び場面における幼児へのかかわりに関する研究
－領域「健康」および幼小連携の観点による経験豊富な幼稚園教師の意識－

A Study of Promoting toward young Children in Physical Activity Play Scenes
－From “Health” Area and Cooperation between Preschools and Elementary Schools points of view Thinking of Experienced Nursery Teachers

橋　本　卓　三　　梅　村　拓　未[*1]　　中　島　寿　宏[*2]
HASHIMOTO Takuzo　　UMEMURA Takumi　　NAKAJIMA Toshihiro

Ⅰ．研究の背景

子どもの体力・運動能力の低下が指摘されているとともに，近年は運動を積極的にする子どもとそうでない子どもの二極化傾向が問題視されている（平川・高野，2008）。運動に対する積極性に関する二極化傾向は，幼児期の子どもについてもすでに報告がされている。運動能力の高さによって身体活動量に違いが生じており，その要因として自身の体を使って遊ぶ経験の乏しさや運動嫌いなどが関係していることが示唆されている（田中，2009）。これらの幼児期の運動の課題に対して，2012年には，幼児期の子どもを対象として「幼児期運動指針」が文部科学省から公表されている。「幼児期運動指針」では，都市化や少子化の進展によって，体を動かして遊ぶ機会が減少しており，幼児期からの多様な動きの獲得が損なわれ，体力や運動能力の低下に影響していることが指摘されている（文部科学省，2012）。さらに，中村ほか（2011）の1985年と2007年の幼児期の７種類の基本的動作パターンを比較した研究では，2007年の幼児の動作様式がより未熟であり，1985年の幼児と比較して，低い発達段階にとどまっていることが報告されている。つまり，現代社会の様々な変化による子どもたちの運動機会の減少は，断続的な発達の遅れを進めることになり，児童期以降の発育発達にも支障をきたしている可能性が考えられる。

その一方で，幼児期の多様な動きの経験は，多様な動きを獲得し洗練させるだけでなく，幼児の体力を全体的に高める働きをすることが指摘されている（杉原，2000）。さらには幼児期に運動遊びに興味をもち，身体活動が活発であった子どもたちは，小学校入学後も活発に学校生活を送り，健康や体型，体力など健全は発育発達をする可能性が示唆されている（金ほか，2011）。上述のように，現代においては，幼児期の運動機会の減少や数年前と比較して低い発達段階にとどまっていることが課題として考えられる。しかし，幼児期に運動に対して自主的に取り組む素地を身につけ，運動の楽しさを子どもたちが享受することで，その後の学校生活

＊1　北海道教育大学大学院教育学研究科　　＊2　北海道教育大学札幌校

においても大きな効果を期待することができる。幼稚園教育要領（文部科学省，2017）の領域「健康」のねらいには，「自分の体を十分に動かし，様々な動きをしようとする」とある。内容には，「走る，跳ぶ，登る，押す，引っ張るなど全身を使う遊びを楽しむ」とあり，内容の取扱いには，「一人一人の発育に応じて，体を動かす機会を十分に確保し，自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること」とある。また，教師の役割の項には，「一人ひとりの幼児に対する理解に基づき，環境を計画的に構成し，幼児の主体的な活動を直接援助すると同時に，教師自らも幼児にとって重要な環境の一つであることを念頭に置く必要がある」と示されている。子どもたちが主体的に運動に参加でき，運動の価値を体感できるようになるためには，幼稚園教師のかかわりの質の高さがこれまで以上に求められている。

幼稚園での運動場面における教師の子どもへのかかわり方や指導に着目した報告もされている。幼稚園教師の運動遊び場面による専門性が求められている中，運動指導を担当する幼児体育指導者などの専門の指導者を採用し，運動の指導を行っている園が多い（桐川ほか，2016）。しかし，幼児の体力を高めることをねらいとした指導者による一斉指導よりも，遊びとして運動を経験している園の方が様々な運動パターンを経験できることが示唆されている（杉原ほか，2011）。また，幼児体育指導者よりも幼稚園教師は運動遊びの指導において，楽しんで運動することを重視する傾向が強いことが報告されている（桐川ほか，2016）。運動指導専門の指導者に任せることよりも，幼稚園教師が遊びを通して子どもたちに運動の楽しさを味わわせることの重要性がこれまでの研究では述べられてきた。しかしながら，運動遊び指導に対して，運動指導者がいない園の教師の方が課題や問題を感じており，運動に対して苦手意識を持っている幼稚園教師もいるとの指摘もある（吉田・岩崎，2014）。遊びを通して幼児が運動を楽しむことによる様々な身体的，社会的効果が示されてきたが，運動遊びにおける子どもたちへのかかわり方に不安を持っている幼稚園教師が多いことが予想される。

そういった幼稚園教師たちの不安もある中，幼稚園と小学校の連携（これより先は幼小連携とする）が強く求められ，特に運動遊びと体育において関連性が強いと考えられる3つの資質・能力うちの「学びに向かう力，人間性等」では，「10の姿」として「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」が明示されている（中央教育審議会，2016：文部科学省，2017）。つまり，これまで以上に幼稚園の運動遊び場面では，遊びを中心としながら小学校につながる多様な力の獲得が求められていることが考えられる。しかしながら，経験豊富な幼稚園教師が運動遊びの場面において，小学校とのつながりを考慮しつつ，どういった意識で子どもたちとかかわっているか明らかにした事例は見られない。

そこで本研究は，領域「健康」における運動遊びの場面において，経験豊富な幼稚園教師が幼小連携を見通して子どもとかかわる際にどのような意識をもっているか検討することを目的とする。

（梅村拓未・橋本卓三）

Ⅱ．研究の方法

１．調査対象者

札幌市内の２つの公立幼稚園の教師４名および小学校教師１名の計５名を対象に調査を実施した。５名の調査対象者は，全員が約20年の幼稚園教師としての経験があり，幼稚園での指導経験が豊富であると判断し，調査対象に選定した。中（1996）は，11年以上の経験豊富な幼稚園教師が，子どもが遊びに熱中している場合に遊びを優先するといった心理面への配慮に長けているとしている。中（1996）の報告を受けて，実際の運動遊び場面で経験豊富な幼稚園教師がどのようなことを意識して幼児と関わっているのか明らかにするため，経験年数の長さによって対象を選定した。調査にあたっては，対象者が所属する幼稚園の園長および小学校の校長に了承を得た上で，調査の内容，目的，プライバシーの保護，データの使用範囲，参加の拒否ができることなどについての説明を実施している。対象となったそれぞれの教師にも同様に，本人からの同意を得た上で調査を実施した。

２．調査手続き

調査は，2020年10月下旬から11月初旬にかけて実施した。調査方法については，調査対象者が所属する幼稚園および小学校に赴き，対象教師５名それぞれに半構造化インタビューを実施することとした。１人あたりのインタビュー時間は20分から30分程度であり，インタビュー内容はICレコーダーにて会話を録音した。近年，子どもの自発性を重視する運動遊びの指導や援助，適切な環境づくりの再検討の必要性（桐川ほか，2016）や，幼児期と児童期における連携の重要性が高まっている（田中，2018）。そのため，本研究では「運動遊び場面で子どもとかかわる際に，どのようなことを意識しているか」および「小学校段階を見据えた子どもたちの発育発達をどのように考えているか」について質問した。実際のインタビューにおいては，その質問項目を記したインタビュー・ガイドを参照しながら質問を行い，それぞれの対象者から回答を得た。面接の際は，会話の内容によって質問の順番や内容を変更するなど柔軟に対応した。

３．分析方法

３－１．KJ法

本研究で対象となった経験豊富な幼稚園教師の運動遊び場面で子どもとかかわる際の意識および小学校段階を見据えた発育発達に対する考えを解釈するために，KJ法を用いて質問内容に関する回答をカテゴリー分類した。分析の流れとしてまずは，ICレコーダーに録音した音声データを全て文字データに起こした。その後，文字データを文章で区切り，それぞれカードに記載した。カードに記載した後，キーワードで括り類似していると考えられるキーワードごとにグループを作成し，最終的には５～６個のカテゴリーに分類した。KJ法のキーワードお

よびグループの作成，カテゴリーの分類については，保健体育科教育学を専門とする大学教員１名および保健体育科教育学を専攻する大学院生２名でおこなった。

３－２．テキストマイニング

それぞれの質問に対する対象者の語りを文字に起こして全て質的データとした。経験豊富な幼稚園教師が運動遊びの場面でどのような意識をもっているか可視化するために，それぞれの質問の回答についての質的データをテキストマイニング（NVivo）した。テキストマイニングではワードクラウドおよびワードツリーを出力し，文脈の中でのそれぞれの言葉の重要度および頻出度を分析した。

（梅村拓未・中島寿宏）

Ⅲ．結果と考察

本研究では，幼稚園における運動遊び場面において，幼稚園教師が子どもへのかかわりの際にどのようなことを意識しているか検討した。小学校との接続において重要とされている幼児の運動遊びの場面について，対象とした幼稚園教師５名を対象に半構造化インタビューを実施した。主な質問内容は，「(1) 運動遊び場面で子どもとかかわる際に，どのようなことを意識しているか」および「(2) 小学校段階を見据えた子どもたちの発育発達をどのように考えているか」についてである。幼稚園教師のかかわりの意図や考えを詳細に聞くために，それぞれの調査対象者の答えに応じて調査者が臨機応援に質問する半構造化の形式をとっている。

(1) 運動遊びの場面において子どもへのかかわりで意識していること

経験豊富な幼稚園教師が，運動遊びの場面でのどのようなことを意識して子どもたちにかかわっているか明らかにするためにインタビューを実施し，KJ法でカテゴリー分類をおこなったのちに，テキストマイニングによって分析した。運動遊びの場面での子どもへのかかわる際の意識については，KJ法によって「運動の魅力」「参加意欲を引き出す環境」「他者意識」「自己成長の実感」「子どもの実態把握」「多様な動きの経験」の６つのカテゴリーに分類された（表１）。１つ目のカテゴリーとして「運動の魅力」が導出された。経験豊富な幼稚園教師は，子どもたちが体を動かすこと自体に楽しさを見出し，「運動の魅力」に浸ることを重視した関わりを意識していることが結果から示唆された。２つ目は「参加意欲を引き出す環境」がカテゴリー化された。子どもたちのやる気を引き出すために幼稚園教師はさまざまな手立てを考えたり，かかわり方を工夫していたりしている様子が結果から推察された。３つ目のカテゴリーは「他者意識」であった。このカテゴリーでは，それぞれの発達段階によって子どもたちの友達や先生に対する意識が違うため，教師側も人間関係のあり方の違いを意識したかかわりを心がけていることが窺えた。４つ目のカテゴリーは「自己成長の実感」であった。このカテゴリー

において，幼稚園教師はそれぞれの子どもたちが自らの力で取り組み，成長できたという実感をもてるようにかかわろうとしていることが考えられる。5つ目のカテゴリーは「子どもの実態把握」となった。発達段階や年齢という視点だけでなく，子どもたち一人ひとりのこれまでの経験値が大きく異なるため，運動遊びの場面においても多角的な視点で子どもたちのタイミングを観察しようとしていることがそれぞれの教師に対するインタビューから推察された。6つ目は「多様な動きの経験」というカテゴリーが導出された。子どもたちのやりたいという思いを大事にしながらも様々な体の動きが自然と発生するように場を工夫したり，遊びを考えたりしていることが結果から考えられる。幼児期運動指針においても「多様な動きの経験」が挙げられており（文部科学省，2012），経験豊富な幼稚園教師は子どもたちの遊びに対する意欲を喚起しつつも，発達に即した動きを引き出す働きかけをしようとしていることが推察された。

テキストマイニングの結果においても，経験豊富な幼稚園教師は「子ども」を最も重要視し

表１．運動遊びの場面において子どもへのかかわりで意識していること（KJ法）

グループ	キーワード	対象教師の語りの例
運動の魅力	楽しさの継続 一人ひとりの手応え 走る心地良さ 体を動かす楽しさ なりきり遊びの楽しさ ジャンプする楽しさ 楽しさの感じ方	A：一番の目的は体を動かして楽しいと感じてほしい. B：とにかく一緒に楽しみながら体を動かす楽しさを感じてほしいと思って関わっている.
参加意欲を引き出す環境	やってみたい環境 参加意欲 できる環境 運動との出会い	C：思わず遊びに参加したくなるように，自分が走ったり自分が楽しんだりすることが多い. E：やろうと思うまでが難しいと思うのでやっていて楽しいと思えるようにしたい.
他者意識	仲間との共有 先生と遊ぶことの楽しさ 友達との刺激のし合い 先生や友達との運動 周囲の理解と組織遊び 認め合う雰囲気 他学年からの刺激	A：年長さんの後期になれば友達と一緒に、仲間がいるからこその楽しさを共有できる. D：周りが見えて組織して遊ぶことが楽しくなる時期が年長だと思う.
自己成長の実感	自己成長 自己の力の発揮 自分を超えることへの価値づけ 自分の成長の実感	B：子ども自身もできるようになることが嬉しかったり，もっとやろうという気持ちにつながったりすると思うので，手をかけてあげればいいわけではないと思う. D：例えば鬼ごっこなら，捕まりたくない，より多くの人を捕まえたいというように自分の力を発揮したい気持ちでやっている.
子どもの実態把握	子どもたちの取り組みの観察 個々の経験値 個々のタイミング 幼児の自主性 教師の支えや価値づけ 手を離すタイミング 子どもの実態の見極め 必要なことやねらい 発達段階	A：発達段階や年齢だけではなく，個々の経験値や特性のある子もたくさんいて，一人ひとりのタイミングがある. B：その年齢やその時期に大事な事があると思うので，子ども一人ひとりがどういう実態なのか見極めて，今必要なことやねらいを考えながら関わることが大切だと思う.
多様な動きの経験	運動する環境 体の使い方の経験 様々な体の動きが経験できる環境 足の運び方やバランス 幼児自身の体の使い方 体幹を使う遊び 体のいろいろな部分を使う遊び	E：子どもたちがやろうとしていることに体を動かす要素が入っているかを見極めるようにしている. D：いろいろな活動の中で体を動かしたり，多様な動きが出来るような遊び方をしたりしている.

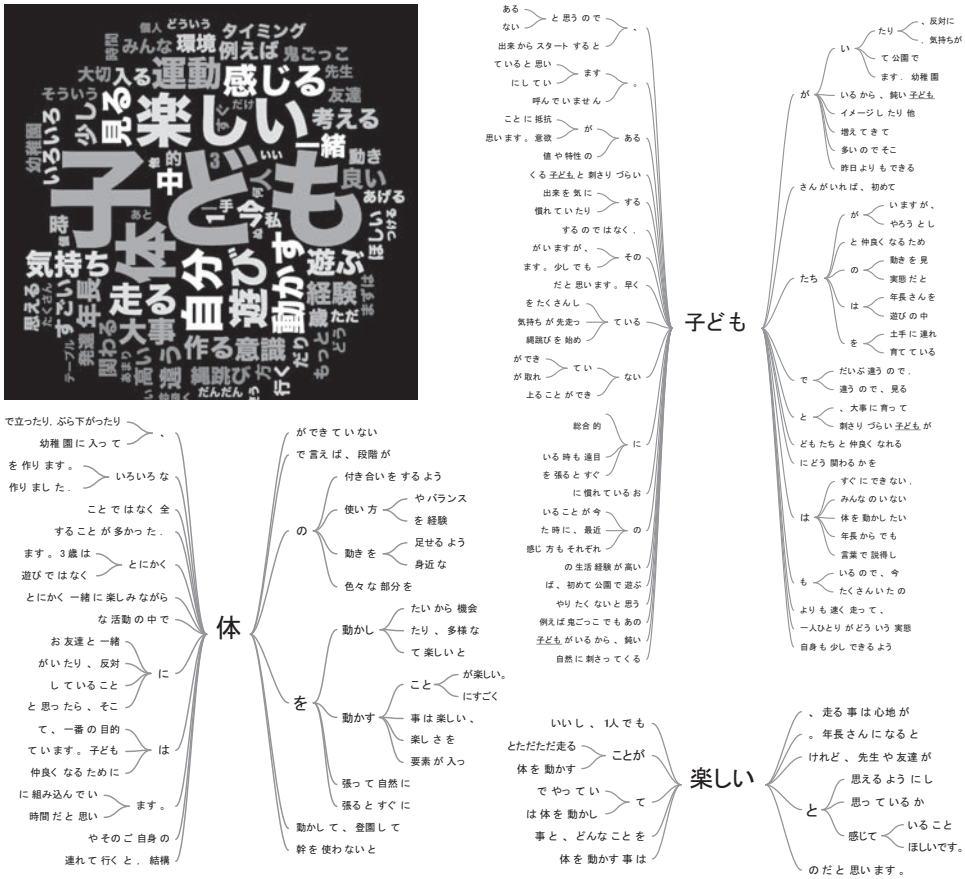

図１．運動遊びの場面において子どもへのかかわりで意識していること（テキストマイニング）

ており，それぞれの子どもたちの実態に即したかかわりを意識していることが考えられる（図１）。その上で，「体」の使い方や多様な動きが出るように運動遊び場面でかかわっている様子が推察された。また，体を動かす「楽しさ」を子どもたちに感じてもらうことを重要視していることが文脈上の重要度から示唆された。本研究の結果からも，桐川ほか（2016）が述べるように，幼稚園教師は子どもたちが運動を「楽しむ」ことができるようにかかわっていることが考えられる。また，杉原ほか（2011）の報告では，運動意欲の喚起が困難であり運動パターンが限られる一斉指導による運動経験よりも，遊びとしての運動経験の方が子どもの運動発達にとって効果的であるとされている。経験豊富な幼稚園教師は，子ども一人ひとりの実態を捉えて，子どもたちに遊びの一つとしての運動の楽しさを味わわせ，結果として多様な動きの経験値の獲得を目指していると考えられる。

(2) 小学校段階を見据えた子どもの発育発達に関する意識

経験豊富な幼稚園教師の小学校段階を見据えた子どもたちの発育発達の捉えについて，インタビューデータをKJ法でカテゴリー分類をおこなったのちに（表２），テキストマイニング

を行い，ワードクラウドおよびワードツリーを出力してテキストを分析した（図２）。KJ法によって，「運動への好意的態度」「他者とのかかわり」「経験の積み重ね」「有能感の芽生え」および「運動コントロール能力」の５つのカテゴリーに分類された。

１つ目のカテゴリーは「運動への好意的態度」であった。経験豊富な幼稚園教師は子どもたちが体を動かす喜びや楽しさを感じることに重点を置いて指導しており，運動に対するポジティブな姿勢が小学校での体育の授業にもつながると考えていることが結果から示唆された。２つ目のカテゴリーは「他者とのかかわり」となった。経験豊富な幼稚園教師は，子どもの発達段階に沿った運動遊び場面での他者とのかかわり方の変容を認知した上で，子どもたちと接していることが示唆された。テキストマイニングの結果からも，年長に近づくにつれて「自分」と他者との関係性を子どもたちが認知していくことを教師ははっきりと認識してかかわっていることが推察された。木村・村岡（2009）は，幼児が集団的な遊びの経験の中で，仲間に入ったり友達と一緒に遊んだりする方法を身につけ，その過程で遊びに対して意欲を示すようになることを報告している。他者とのかかわりの様相を教師が把握しておくことは，子どもたちがその後も運動に対して意欲を示す上で不可欠であると考えられる。３つ目のカテゴリーは「経験の積み重ね」であった。インタビューにおいて，経験豊富な幼稚園教師は遊びの中での様々な動きの経験の蓄積が子どもたちの幼児期以降の生活につながっていると述べていた。テキストマイニングの結果からも，経験豊富な幼稚園教師は幼児期の多様な経験が小学校での学びとのつながりを意識していることが推察された。吉田ほか（2015）の調査では，幼児期の多様な動きの経験がその後の運動発達に関係することが示されているが，経験豊富な幼稚園教師は子どもたちの児童期以降の発達にも配慮しながら運動遊び場面を捉えていることが結果から考えられる。４つ目のカテゴリーとして「有能感の芽生え」が導出された。経験豊富な幼稚園教師は子どもたちの成功体験を大事にしており，子どもたち一人ひとりが手応えを感じられる働きかけをすることで，次のチャレンジにつながると考えていた。５つ目のカテゴリーは「運動コントロール能力」であった。運動コントロール能力とは，知覚を手がかりとして運動を自分の思うように巧みにコントロールする働きのことであり，運動コントロール能力を高めるためには，様々な運動パターンとそのバリエーションを経験することが必要である（杉原，河邉，2014）。経験豊富な幼稚園教師は，子どもたちが自分でイメージした通りに体を動かせるようになるための援助をしようとしていることがインタビューの結果から示唆された。

幼児期の運動遊びでの経験は児童期以降の発育発達に大きな影響を及ぼすことが考えられる。遊びとして運動を経験している子どもたちは，指導者の一斉指導によって運動している子どもたちより多様な運動パターンを経験していることが明らかになっている（杉原，2011）。さらに多様な運動パターンの経験は運動能力や運動コントロール能力を高め，自信や積極性などの性格にも明確に影響することが強く示されている（杉原・河邉，2014；杉原ほか，2010）。つまり，子どもが意欲的におこなう遊びを通した運動は，運動能力や運動コントロールへの正の影響だけでなく，児童期以降の社会生活にも多くの効果をもたらすことが考えられる。本研究

表２．小学校段階を見据えた子どもの発育発達に関する意識（KJ 法）

グループ	キーワード	対象教師の語りの例
運動への好意的態度	体を動かす喜びや楽しさ 走る楽しさ 運動への好意的な態度 諦めずに頑張る楽しさ 運動好き	C：走ることが好きになった子どもたちがリレーを楽しいと思っているのか、力もあるから選手に選ばれる子も多く，自信がつくところは大きいと思います。 D：何を経験したとしてもその中で体を動かす喜びや楽しさ、友達と仲間になって運動を楽しむことが結局体育の楽しさにつながると思います。
他者とのかかわり	仲間への声かけ 人間関係の育ち 他者との遊び 他者刺激による運動への意欲喚起 他学年の活動 他者との比較 集団での遊びの楽しさ 友達や先生との共同遊び グループ化 子どもたち同士での遊びの構築 他者の良さへの気づき 自己の客観視 認め合い 友達へのリスペクト	A：人と体を動かして楽しかったりすることが人とのかかわりや協働性にもつながっていくと思っています。 B：年中さんになるとお友達と一緒に先生も交えて一緒に遊んでいます。先生が中心だけれど、少し子供たちのグループができていきます。 D：できない自分に気づくよりも、できる友達をリスペクトしていくように変わっていくと思います。
経験の積み重ね	これまでの経験とのつながり 遊びの中での経験 基礎的な経験 個々の経験の違い 段階を踏んだ経験 多様な動きの経験	A：できそうだと思える素地を育てるために、何でも興味を持つので，たくさんいろいろな動きを経験できるようにします. D：体の動きも遊びの中でいろいろ経験してきたことが、小学校でなんとなくつながったり、基礎的に経験していることが自覚しないで出てきたりする。
有能感の芽生え	できることへの自信 成功体験 満足感や充実感 一人一人の手ごたえ 手ごたえのある遊び 遊びの難易度 敏捷性が必要なことへのチャレンジ チャレンジする面白さ	B：幼稚園の時に体を動かす楽しさや挑戦したり頑張って取り組んだりすることで、小学校ではじめてのことにぶつかったときに「やってみよう」「やればできる」という思いになると思います。 E：少しずつチャレンジするレベルが上がっていくことが子どもたちは面白いのだと思います。
運動コントロール能力	体の動かし方 巧緻性の発達 イメージして動くことができる力 思った通りできる感覚 動きのイメージの発達 できることの広がり	C：思った通りにできた、イメージした通りに取り組むことができたと思える内容をそれぞれの発達に合わせることにこだわる。 E：年中さんは自分でイメージした動きをできるようにしてあげたい。

で示された経験豊富な幼稚園教師の運動遊び場面による意識では，常に「子ども」が中心に据えられており，子どもたちの自主性を尊重した運動遊びが大切にされていることが示唆された。経験豊富な幼稚園教師の子どもへのかかわりは，運動場面に限らず子どもたちの幼児期以降の発育発達に大きな影響を及ぼすと考えられる。

（梅村拓未・中島寿宏）

Ⅳ．まとめ

本研究は，経験豊富な幼稚園教師の運動場面での子どもへのかかわりの際の意識および幼小連携の視点から見た子どもの発育発達についての意識を明らかにすることを目的として，経験豊富な幼稚園教師５名に半構造化インタビューを実施した。KJ 法でカテゴリーの分類を実施

図２．小学校段階を見据えた子どもの発育発達についての意識（テキストマイニング）

した結果，運動場面における子どもへのかかわりの際の意識は，「運動の魅力」「参加意欲を引き出す環境」「他者意識」「自己成長の実感」「子どもの実態把握」「多様な動きの経験」の６つのカテゴリーに分類された。また，幼小連携の視点から見た子どもの発育発達についての意識は，「運動への好意的態度」「他者とのかかわり」「経験の積み重ね」「有能感の芽生え」および「運動コントロール能力」の５つのカテゴリーに分類された。テキストマイニングの結果からは，子どもとのかかわりにおいて，「子ども」一人ひとりの実態を捉えること，「体」を動かすことの「楽しさ」を中心に捉えていることが推察された。また，子どもの発達段階については，「子ども」一人ひとりを把握し，「自分」と他者との関係を意識していく過程があることを教師は把握し指導にあたっていることが示唆された。本調査の結果から，経験豊富な幼稚園教師は，子どもたち一人ひとりの寄り添い，幼児期における遊びを通した多様な動きの経験の重要性や他者との関係性の発達を考慮して，日々子どもたちとかかわっていることが考えられる。

本研究はインタビューによって経験豊富な幼稚園教師の運動遊び場面での意識について質的

に明らかにした。しかしながら本研究で整理された内容が実際の指導場面でどのように表出するかは未知である。今後は，実際の指導場面に焦点を当てて，経験豊富な幼稚園教師が子どもにどういったかかわり方をしているのか明らかにしていく必要があると考える。

（梅村拓未）

Ⅴ．文献

平川和文・高野圭（2008）体力の二極化進展において両極にある児童生徒の特徴．発育発達研究，37：57-67.

金美珍・小林正子・中村泉（2011）幼児期の運動や運動遊びの経験が学童期の子どもの生活・健康・体力に及ぼす影響．小児保健研究，70(5)：658-668.

桐川敦子・中道直子・内山有子（2016）幼稚園における運動遊び指導の課題．チャイルド・サイエンス：子ども学，12：53-56.

中村和彦・武長理栄・川路昌寛・川添公仁・篠原俊明・山本敏之・山縣然太朗・宮丸凱史（2011）観察的評価法による幼児の基本的動作様式の発達．発育発達研究，51：1-18.

中俊博（1996）保育者の保育観：幼稚園と保育所の比較からみた．和歌山大学教育学部実践研究指導センター紀要，６：129-142.

文部科学省（2017）幼稚園教育要領解説．フレーベル館

文部科学省（2012）幼児期運動指針

杉原隆（2000）新版幼児の体育．建帛社.

杉原隆・河邉貴子（2014）幼児期における運動発達と運動遊びの指導―遊びのなかで子どもは育つ―．ミネルヴァ書房.

杉原隆・吉田伊津美・森司朗・中本浩揮・筒井清治郎・鈴木康弘・近藤充夫（2010）幼児の運動能力と運動指導ならびに性格との関係．体育の科学，60(5)：341-347.

杉原隆・吉田伊津美・森司朗・中本浩揮・筒井清治郎・鈴木康弘・近藤充夫（2011）幼児の運動能力と基礎的運動パターンとの関係．体育の科学，61(6)：455-461.

田中一徳（2018）幼児期児童期における運動あそび指導の検討―滝川市内幼稚園・保育所・小学校連携推進研修会の実践事例―．國學院大學北海道短期大学部紀要，35：69-85.

中央教育審議会（2016）幼児教育部会における審議の取りまとめ（報告）

吉田伊津美・岩崎洋子（2014）園での運動遊び指導と運動遊び指導に対する幼稚園教諭の認識．発育発達研究，64：18-24.

吉田伊津美・森司朗・筒井清次郎・鈴木康弘・中本浩揮（2015）保育者によって観察された基礎的運動パターンと幼児の運動能力との関係．発育発達研究，68：1-9